

混和会とは、共に許し合いながら、他の人格を尊重し、共に生きる和の構築を目指す集いです。

ほとけの 混和会だより

令和五年三月
東光院
仏の混和会
第165号



道心を育む比叡山

道心の中に衣食あり ドウシン エジキ
衣食の中に道心なし エジキ ドウシン
この言葉は比叡山を開かれた最澄様のお言葉です。道心とは、ブツダの御心、この道を求める求道心で、慈愛心を育むものです。衣食とは、衣食住の生活環境の事ですが、日々の生活の中に於いて、結果だけを求める己の行為として受け止めて見ると様々な怖い一面も見えて参ります。

この言葉の受け止め方は「道心」人々を慈しむ心、己を忘れて他の幸を願う慈愛心があれば「衣食」すなわち日々の生活は自然と満たされて参りますよ。「衣食」豊かな生活や収益を得る事だけを目的に人生を歩んでも良い結果は得られませんよ「道心」が無ければ人々の信用も得られず、不安に満ちた生活を営む事と成りますよ。と最澄様はブツダの道を志す者を励まして下さいました。しかし昨今の私達の社会は「衣食」すなわち利益という結果だけを求める競争社会と成ってしまいました。よって「道心」すなわち人の仁愛と言うものを見失っているように思われます。私達の社会は競争に勝つ為に、人々の欲望を満たす利便性を売り物に生き残りを託した結果、便利さに溺れ人々を思いやる共生の心

を著しく低下させてしまい、不安に駆られ自己中心で感謝の心を失った孤独社会を歩む事と成って、あげくの果てに凶悪犯罪が横行する社会と成ってしまいました。
「四無量心」
人間は決して一人では生きられない弱い存在です。支えあいが必要で、この「支えあい」の心のあり方を説いた教えに「四無量心」があります。四無量心とは「慈・悲・喜・捨」の四つの心です。左記に列記致します。
慈無量心—友愛の心、慈しみの心をかぎりなくはたらかせること。
悲無量心—ひとに対する同情とおもいやりの心をかぎりなくはたらかせること。
喜無量心—人をしあわせにすることを喜び、また、人の喜びを自分の喜びとする、この喜ぶ心を限りなくはたらかせること。
捨無量心—執着心を捨て分けへだてなく接する心、それを限りなくはたらかせること。この四つの心を共に歩む人びと

この度檀信徒皆様の長い間のご厚誼により、庫裏を建て替える運びとなりました事ご報告申し上げますと共に謹み御礼申し上げます。付きましては仮住まいとして薬師堂を利用させて頂いております。檀信徒の皆様にかかれましては何かとご不便をおかけ致します事、ご理解賜れますようお願い申し上げます。合掌



令和5年2月17日

御陰様で庫裏を建て替える運びと成りました。

に手向けることよって、共生の社会を築く事が出来ます。仏の教えは、私たち人間の生きる杖であり、支えであります。仏の教えを学び、同じ道を歩む人々と一緒になって、共に生きる環境を築いて参りたいと存じます。 合掌



毎年新年号にて干支に纏わるお話を紹介しておりましたが、前号では別の物を紹介した為、今回うさぎに纏わる仏教のお話を紹介します。

●月のうさぎ



これはお釈迦様が前世で兎だった時のお話です。ある森に兎・猿・狐・カワウソの四匹が仲良く暮らしておりました。ある日、四匹の暮らす森に衰弱した老人が入ってきました。

四匹は老人を助けようと食べ物を探しに出ます。猿、狐、カワウソはそれぞれ食べ物見つけますが兎は見つけ出せませんでした。

何か老人に差し出したい思った兎は老人に薪に火を付ける事を頼むと

「私は他の友のようにあなたへ布施出来る様な物を用意する事は出来ませんでした。そこで今から私は火の中へ飛び込みますので私を食べて英気を養ってください。」
と言うと火の中へ兎は飛び込みました。

それを見た老人は驚き姿を変えました。実は老人の正体は「帝釈天」という仏教の守護神でした。

「見ず知らずの者にも見返りを求めず全身全霊で布施をする慈悲の心に感銘した。
この心を多くの人にも伝え残す為、兎を月へ届けましよう。」

と言いつつ兎を月に届ける時、満月の度に布施と慈悲の教えの光を灯す様になりました。とき

確かに見返りを求めない優しいさを施すととは正解も無い難しい行為であります。ですが、私は最も尊い「命」を布施した事を美談として書かれ手いる事にならずと疑問を抱いていました。

昔は「焼身供養」と言う自らの肉体を供養する行為は法華経の布施行の極致とされていきました。その為兎も最善の行為としたのでしようが、その後残された親友達は兎と老人にどんな気持ちを抱いたのでしょうか。又、老人が人間だったら：と。自己犠牲による行動で本人は満足しても、その傷つく姿を見て心を痛める人も必ずいるはずで

このお話に関して言えば、信頼出来る友が三匹も側にいたのですから一人では無く共に考える事もあり大切だったのではないかと私は思います。



人新世の『資本論』とは
大阪市立大学の准教授
斉藤幸平さんの「脱成長」を訴える書物で、異例の大ヒットとなっているそうです。

人類の経済活動によって地球が危機的状況下に於かれています。これを乗り越えるにはSDGsを唱えるだけでは無く、世界中で経済成長を止める事に救いがあると主張されているのです。

経済成長を前提においた各国の政策、又人類の本能である成長と言う欲望を抑える事は大変困難な事かもしれない、しかし経済成長だけでは眞の幸は得られないと主張しておられました。

脱成長
ヒトシンセイ
人新世の『資本論』

「自然との共生」
山川草木悉皆成仏



令和5年2月22日
午前6時20分頃
新川に淡く光る朝焼け

わたしの唯一の楽しみは早朝の散歩です。

夜明け前の薄暗い朝、カメラと懐中電灯持ち約2時間歩きます。田園が雲海に成ったり、そして時には朝焼けが新川を赤く染めてくれて清々しい想いを頂き、そつと手を合わせます。

私達は太陽のお陰、清流のお陰、田園で育てられるお米のお陰、大自然の営み、そして様々な命が編み目の如くつながり合い、私達は生かされて居ます。

よつて山も川も草も木もみな仏様と感謝の想いを抱く事が出来たら皆、仏様になります。